

平成 23 年 7 月 15 日

平成 23 年度病害虫防除技術情報第 1 号

和歌山県

1. 対象作物：カンキツ（甘夏、ネーブル、伊予柑等の罹病性品種）
2. 病害虫：かいよう病
3. 対象地域：県内全域
4. 発生量：多
5. 発生期間：葉（発芽直後～10 月） 果実（幼果～10 月）
6. 発生状況
 - 1) カンキツかいよう病については、本年 6 月 27 日付けで病害虫発生予察注意報（第 3 号）を発表したところであるが、その後も以下のおり多発傾向が継続している。
 - 2) 病害虫発生予察ほ場（無防除）における越冬病斑量は発病葉率が 15.1%（平成 17.1%）と平成並であったが、6 月中旬の新葉の発病葉率は 41.0%（平成 18.0%）と平成より高かった（表 1）。
 - 3) 7 月 12～13 日の紀南～紀北地域における葉の発病園率は 30%（平成 30%）と平成並であったが、6 月の調査時（23%）よりやや増加している。また、発病が確認された圃場で、本病により落葉が発生している樹がみられた。
7. 防除上の注意事項
 - 1) 1996～2010 年における各年の 7 月の葉の発病園率と 8 月の発病果率には正の相関が認められ（図 1）、今後の果実発病の増加が心配される。現在、小笠原近海に発生している台風 6 号が本県に接近した場合、強風雨等の気象条件により被害がさらに拡大するおそれがある。
 - 2) 本病の病原細菌は強風により生じた傷口から組織内に入って発病するため、台風接近前に銅水和剤の予防散布をすることが重要である。散布時には銅による薬害軽減のため、炭酸カルシウム水和剤 200 倍を加用する（表 2）。
 - 3) 防風垣や防風ネット等を設置し、防風対策に努める。
 - 4) 春葉及び夏秋梢の病斑は果実への伝染源となるとともに、越冬すると翌春の強力な伝染源にもなるので剪除に努める。
 - 5) 樹冠拡大を図っている幼木、高接樹等では特に本病の防除を徹底する。夏秋梢で発病がみられた場合は、罹病部位を芽欠き・摘心して新梢発芽を促す。

表1 予察ほ場(無防除)のネーブルにおけるかいよう病の越冬病斑量と発病葉率の推移

年	越冬病斑量(%)	発病葉率(%)
2001	12.0	14.0
2002	5.0	5.0
2003	10.3	22.3
2004	26.3	35.0
2005	32.8	28.9
2006	39.8	25.0
2007	8.1	27.0
2008	22.8	6.0
2009	6.5	1.5
2010	6.9	15.0
2011	15.1	41.0
平年(2001~2010)	17.1	18.0

※越冬病斑量は3月中旬、発病葉率は6月中旬に調査

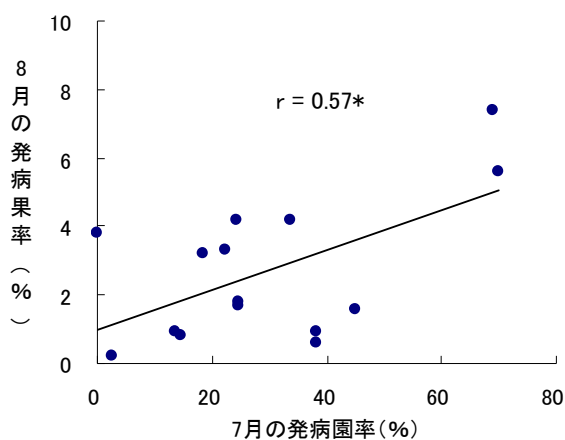


図1 カンキツかいよう病における7月の葉の発病園率と8月の発病果率の関係
* 5%水準で有意性あり

表2 カンキツかいよう病に登録のある主要な薬剤(2011年7月14日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数
コサイドポルドー	2000倍	-	-
コサイドDF	2000倍	-	-
コサイド3000	2000倍	生育期	-
Zポルドー	500~1000倍	-	-

※散布時には炭酸カルシウム水和剤(クレフノン)200倍加用